



古川博士の 気象コラム

古川武彦…理学博士。元気象庁予報課長、札幌管区気象台長。退官後に「気象コンパス」を立ち上げ、気象の啓発活動などを行う。

いよいよ今月から東京オリンピックが開催されます。前回の東京オリンピックと同年の昭和39(1964)年に「富士山レーダー」の運用が開始されました。このレーダーは、伊勢湾台風の被害を機に、大災害から国民を守ることを目的に建設され、最大800kmの彼方まで台風などの気象観測を行っていました。当時、気象研究所台風研究部に勤務していた私は、数年後に気象レーダーの開発を担う技術者たちの命がけの貢献があったことを知りました。皆さんはご存じでしたか？

富士山レーダーは無人運用で、観測データは東京大手町の気象庁に無線伝送する方式で設計され、途中の高層ビルで電波が遮られないかが問題となり、結局、実際に山頂でフライヤーを焚いて、それを大手町から確かめることになりました。厳寒の中、技術者と山岳ガイドの7人は、ガチガチの氷面を、アイゼンを履き、ピッケルを手に一步一步と山頂を目指しま



写真提供：気象庁

▲昭和39(1964)年から35年間気象観測を続けていた富士山レーダー

した。ようやく山頂に辿り着き、そこで幾夜かフライヤーを焚き、やっと大手町からの視認に成功しました。

以来、35年にわたって観測を継続しましたが、気象衛星「ひまわり」の打ち上げで、平成11(1999)年に遠方監視の役割が終わりを告げ、平成13(2001)年に解体・撤収。有人であった富士山測候所は平成16(2004)年に無人化されました。

現在、気象レーダーは沖縄、東京、札幌など全国に20基地。鹿行地方の雨雲は、東京レーダー(千葉県柏市)で観測されています。気象レーダーから電波を発射し、戻ってくるまでの時間で距離を測り、電波の強さで雨や雪の強さを観測します。降水の短時間予報を正確に推定することが可能になりました。

